

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

第三十四号（二〇〇九年三月）

風に吹かれて（〇九ノ三）

白井啓治

『大きく恋の紡いで里娘の笑顔』

二月二十二日、ことば座の今年第一回目の公演が終わった。我が百姓の師であるふたば自給農園の松山さんと畑仕事をしている時に出てきた、縄文後期の土偶と百姓娘松山さんとをモチーフに、このふるさとに寄せる思いを舞い物語にして書き下ろした作品であるが、稽古不足に頭を抱える出来ではあったが、概ね楽しく終えることが出来た。公演が終わって改めて、物語を振り返って見たとき、作品に自画自賛するのではなく、このふるさとに自画自賛したい想いが一層に強くなってきた。古人（いにしえびと）が言ったように、やはりここは常世の国、まほろばの里であると断言できる地であろうと思う。

今、瓦谷の瓦塚という所で、常陸国府の館、国分寺等の屋根瓦を焼いたとされる窯跡の発掘調査が行われているのであるが、この国が常世の国であり、まほろばの里であることを検証し、未来への暮らしを紡ぐ軸を構築することが必要ではないのだろうか。石岡に国府があったとか、国分寺の瓦を焼いた跡だとかを調査することも良いが、それ以上に、何故石岡に国府を設置するに至ったのか、その根拠に繋がる国府以前の常世の国と呼

れるに値する、この地そのものの有する豊かさに目を向けて、縄文にさかのぼることの方がはるかに重要なのではないのだろうか、と思ってしまう。

石岡地区というか、この地域には弥生の文化遺跡の少ない所である。そのことは、縄文、弥生、近代への、文化的発展の流れの必要でなかったほど暮らしの豊かな地であったことの証明のような気がするのであるが、どうなのであろうか。

縄文人たちが、より便利な文化を構築しなくてはならない必然性を感じ取る必要のないほど豊かな地だったのでないだろうか。それで、突然のように縄文人がこの地を追われ、姿を消して近代大和民族支配になってしまったように思われてならない。石岡で唯一弥生文化の遺跡の出たところは、すでに高速道路の下に眠らされている。

昨年春に、霞ヶ浦を半周するように、霞ヶ浦を囲む里山を眺めてきた。この地の里山は、食料となるブナ科のカシやシイが群生しており、霞ヶ浦の海産物を合わせると実に豊かすぎるほどの地であったことを納得させられた。

栃木県は栃の実を産する栃の木沢山生えている所であるが、栃の実を食するには大層面倒な灰汁抜き作業が必要である。いかに大量に栃の実を産しても、暮らしには難儀なことである。その点、

シイの実などは楽で、甘みも多い。しかも周りの里山中に実るのであるとすれば、これほど有難いことはない。霞ヶ浦沿岸には多数の貝塚が見られるように、海の幸も豊富であるとすれば、あくせくと進化を急ぐ必要もなかったのであろう。

朗読舞劇に縄文人を登場させたのは今回で三度目であるが、このふるさの明日を志向し、夢を紡ごうと考えたとき、この縄文の人々に「登場願ひ、その暮らしにヒントを求めることがもつと多くなるのだろうか」と思ってしまう。

こんなことを思い、石岡の国府バカと言いたくなるような偏った文化程度を考えていたら、先に亡くなった筑紫哲也氏が「彼が多事争論というコーナーがあったが、この多事争論に対して彼は次のように言っていたことを思い出した。

「多くの意見を言い合おう。一つの意見だけを受け入れ、他の意見を廃絶しようという低脳な感覚を捨てよう」

正にその通りである。

私は今、石岡に住んで、ここは歴史の里であると真実思っている。しかしそれは、この石岡に千三百年の昔、国府があった所だからではなく、この地はここに国府を置かなければならなかった豊かな地であることをもって、歴史の里と称したいと思っている。

国府ということで見れば日本全国六十幾つかの国府があり、国府そのものには歴史的な価値も無い、ましてや文化的な遺産のことごとくを踏みつぶした所であってみれば尚更である。しかし、常世の国と呼ばれるに値するこの大地の歴史的、文化的遺産は大であると考える。

どうにもならない前期高齢者

ギター文化館代表 木下明男

六十歳の半ばを過ぎて、最近頓に日時の過ぎるのが早く感じられる。仕事柄一年先のスケジュールを模索している所為もあるが、どうもそれだけではなさそうだ。

月に数回の企画の準備、事後処理、対策・・・次から次へと仕事が生まれてくる。時間が早く過ぎるのは仕事に追っかけられている所為・・・しかし、それでもなさそうである。

人生終末への焦りか？ それとも違うようだ。朝五時には目が覚め（寒いから床から出ない）六時になるとコロちゃん（雑種の愛犬）が散歩の催促をいう。暖かい時季には小一時間ぐらい近場を回ってくるのであるが、今は寒いので二〜三分で誤魔化している。

帰ってくる、コーヒーを飲みながらテレビ。その後ニュースを見ながらの朝食。そして朝ドラマ（NHKの連続ドラマ）を見ると、もう出勤の間。

あれもやらなくては、こちらが先だ、お客さんが来た、業者さんの対応、そんな繰り返して気がつくともう夕方の五時で閉館だ。後始末や整理をしているともう、外は真っ暗。こんなことの繰り返しで、もう三月になってしまった。

何も出来やしないのに、今年こそは、来月こそは、来週こそ、明日こそ、今日こそ。結局、時間が過ぎただけで終わってしまう。なのに、出来る心算で書きもしない原稿を容易く引き受ける。

時間ばかり過ぎて、一向に書けないので、大迷惑をかけている。悩んでいるような素振りを見せるが、行き着くところは、何んとかなるさ。そして、懲りもせずに色々仕事を引き受けてしまう。何とかならなくなったらどうしよう。冷や汗。それでも日時は過ぎて行く。

私のお気に入りの日光

工房オカリナアートJOY 矢野恵子

私の故郷は栃木県日光市。現在は市町村合併で足尾町、藤原町、栗山村、今中市、日光市の五つが日光市となりました。

日光は、今からおよそ一二〇〇年前、勝道上人（しようどうしようにん）によって開かれ、輪王寺の元になる寺を建立し、男体山に上り二荒山（ふたらさん）神社を建てたそうです。

その後、神社や寺の門前町として栄え、江戸時代の初めに天海大僧上が徳川家康をまつる東照宮を建ててから、さらに栄えるようになったと言われています。

さて、日光の主な観光地である二社一寺や華厳の滝などは、多くの人が観光や修学旅行で訪れたことのある場所ですが、今回はあまり知られていない私のお気に入りの場所をご紹介しますと思います。

一つ目は、足尾の松木に、日本のグランドキャニオンの異名を持つ「松木溪谷」があります。昔、足尾鉍毒の煙害の影響で山が荒廃してしまった場所ですが、現在では植林活動によって緑が蘇って

きました。五月には山の斜面に黄色い花が咲いて心を和ませてくれます。そばに銅親水公園（あかがねしんすいこうえん）があり、この地域の歴史が展示してありますので、そこに立ち寄ってから散策されるのも良いでしょう。

ついでにちよつと宣伝させてもらいますが、私の主人であるオカリナ奏者野口喜広のCDアルバムの裏ジャケットの写真は、冬の松木の山をバックにオカリナを吹いています。

二つ目は、いろは坂から中禅寺湖スカイラインを進み、半月峠から見下ろす中禅寺湖はまさに絶景です。特に、紅葉の時期にはテレビでよく中継される「八丁出島（はつちようでじま）」の赤と黄色のコントラストは、息をのむ美しさがあります。その景色の中でいつの日かオカリナ演奏ができたら・・・と考えております。

最後に霧降りの滝をご紹介します。数年前展望台の所に「山のレストラン」がオープンし、二階デッキから滝を眺められるようになりました。コーヒーを飲みながら、食事をとりながら全身にマイナスイオンを感じて、ゆったりくつろいでいただける場所です。新緑と紅葉の時期、平日にお出かけすることをおすすめします。

また、この近くの霧降高原では、毎年七月の初めに「日光キスゲまつり」が開かれ、そのイベントの一つとして私達のオカリナコンサートも行っております。一度お出かけ下さると大変嬉しいです。詳しくは日光観光協会のホームページで検索してみてください。

世界遺産の日光の四季折々をぜひあなたの目で眺め、あなたにとっての新しい日光を発見されてみてはいかがでしょうか。

ご愛読頂いております市内の木村進様からの熱心な嬉しいご好意を紹介させて頂きます。この「歴史ガイドに同行して」と題し、常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内したときのことを連載させて頂いておりますが、この原稿に案内箇所の写真添えて、木村さんのホームページに掲載して頂きました。歴史の里石岡で検索されますと、1300年の歴史の里〈石岡ロマン紀行〉という項目が出てきますので、それを開きますと、風の会の紹介と合わせて出て参ります。ぜひ一度ご覧いただけましたら幸甚に存じます。

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

木村様の親身になつてのご協力とご支援に厚く御礼申し上げます。

暖かい励ましを背に今回の「常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内」は、⑩青屋神社と青屋祭り、⑪若宮八幡宮です。

⑩青屋神社と青屋祭

鎮座地、石岡総社二丁目四番地三十号、現在の石岡小学校屋内温水プール隣。

祭神、天照大神、鷗・草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）。

奈良、平安時代、国司に任命され国府に着任すると、国内の大社に報告のため順次参拝して、又毎年、奉幣（神にぬさ…祈る時供える麻、木綿、紙等で作ったものを献上する）祈願のために参向した。その順序の第一は常陸一宮である鹿島神宮であった。これに出むくためには国府の港である高浜から舟で霞ヶ浦を下り北浦を通って鹿島の

地に行つたのであるが、荒天の場合は危険のため高浜の海辺の渚にススキ、マコモ、ヨシなどの青草で臨時の斎場「青屋」をつくり、そこから鹿島神宮を遙拝し、参拝に代えたという。これが青屋祭りの起りといわれている。そして、遙拝式後の直会（なおりい）に「ススキ」を箸にして「鯺鮓」を会食した。民俗行事の「青屋サマ」のお祭りに民間で「ススキ」の箸で「鯺鮓」を食べる習慣になっている。

その遙拝式場が高浜の地に常置され、高浜神社の起源となっている。

総社文書の正安二年（一三〇〇）に国府から西方の地に遙拝所が設けられ、その後旧石岡市役所の西の隣接地が斎場にあてられて、小祠が建てられ「青屋神社」として現存している。これは明治中期のことで、その以前は国府構内に社地として東西二十二メートル、南北九十一メートルの社殿、工作物はなく祭事毎に青茅屋の斎場が設けられたものである。国府官人の子孫の税所家が明治年間まで伝統のまま祭祀奉幣の典礼をつづけて来た。

中世の青屋祭は「常陸遺文」の記録によれば、府中惣社の宮祭のひとつとして六月二十一日に高浜神社、大洗磯崎神社、鹿島神社などの津で、霞ヶ浦と鹿島灘の航海の安全と水産物の豊穰を神に祈願するために行われた。また青屋祭のとき、舟塚山古墳を青野喪山（あおののもやま）と呼び幣帛（へいはく）を供している。この鎮魂神事によって霞ヶ浦の安全を祈つたのであろう。

近世の青屋祭神事は「常府古跡案内するべ」によれば、青屋の馬場（乗馬法を練習する所）と呼ばれるこの辺りで行われた。六月二十日の深夜、二人の者が青ススキ、細竹で青屋をつくる。神拝

は六月二十一日の午後四時から始まり、公家装束の税所氏と小仁所氏が侍姿の大勢の供をつれて参拝する。この間、馬場では神馬を走らせた。神拝が終わると税所氏と小仁所氏は高浜に移り、高浜神社に参拝した。

現在は、町内氏子会七十人によつて七月二十一日頃に行われ、なかでも妊婦さんの参拝がありまずと安産のおしるしとして麻の紐（十センチ位）と小さな四角のお餅を頂くそうです。その麻の紐で髪を結いお産に臨むということでした。又、「私は、子供に恵まれぬ親が熱心に青屋さまにお願ひしたことで授かった者だと仰られる現在七十歳代の方のお話もお聞きすることが出来ました。ススキの箸で鯺鮓を頂いたりする直会は現在も行われているそうです。

⑪若宮八幡宮

鎮座地、石岡市若宮二丁目一番三号。祭神、息長足姫尊、誉田別尊、姫大神。

若宮八幡神社本殿、市指定有形文化財（建造物）平成五年三月指定。神龜五年（七二八）九月に建立されたと伝えられる。永保二年（一〇八二）、八幡太郎義家が奥州征伐の折り、当社に朝敵退散を祈願し、応永二年（三九五）太田道灌が参拝し、武運長久を祈願した。天正十八年（一五九〇）佐竹氏府中攻略の際に焼失した。寛永四年（一六二七）に皆川山城守が再建し、その後寛文五年（一六六五）に領主松平伊勢守が本殿、拜殿を修造、そして元文年間（一七二一）に別当欽長今が神社を改築して天安泰を祈願した。

以上の記録は安永二年（一七七三）別当義寛の記録である。このことは天台宗東耀寺末の若宮八

幡寺の別当が八幡神社を管理して、明治二年の神仏習合禁止令で独立したものである。

外観は拝殿に見える形式でありながら内部には宮殿を造り付けており、一棟で本殿と拝殿の機能を兼ね備えた社殿である。

神門は四脚門形式でありながら扉を設けず後ろの間の左右を囲って随神門に似た造りとし、風神、雷神を祀っている。また前後の柱の形式を変えるといった珍しい手法も特徴である。

現在、十月十日に行われている大祭には子供によります奉納相撲や芸能（主にカラオケ）大会、夕方六時より、石岡のおまつりでの若松町の山車が八幡太郎義家の人形とともに、おかめ、ひよつと、きつねの踊り手と境内はにぎやかさに包まれるそうです。

今回は二社のご紹介となりました。

参考資料 石岡市史（上巻）・石岡の歴史と文化

- ・やすめる義母九十半（くとせはん）の鼓動
- ・初雪に逝きし義母のありがとう（ちえい）

ごんぼ堀り

菅原茂美

「ごんぼ」とは、私の故郷・岩手県では「ゴボウ」の事である。

私は子供の頃から、「ごんぼ堀り」とあだ名され、家族から少々疎まれていた感がある。

なにしろ長い牛蒡を掘るように、なぜ？どうして？を納得いくまで繰り返すのだから、回りの人達は、えらい迷惑であつたらう。

確かに私は、幼い頃から、途方もない質問の連発で、しつこく、まつわりつき、忙しい親を悩ませたようだ。今でもはつきり覚えていたが、『昼間、太陽が頭の上にある時には、小さくて白っぽいのに、夕方西の山に沈む時には、なぜ大きくて、赤っぽくなるの？』『動物の目はなぜ夜光するの？』『お月様はなぜ細くなったり、丸くなったりするの？……』と。

更に中高生ぐらいになつてからは、熊の冬眠、鳥の渡り、伝書鳩の帰巢本能、郭公の托卵、魚の回帰、蛍の集団明滅、猫の反転着地、色々な動物の地震直前の、異常行動など……。回りは疑問だらけ。誰に聞いても、子供が納得できる返事が、返つてこない。となれば、読書で、とことん、「ごんぼ堀り」をする他ない。

そして『なぜ？どうして？』は、大人になつても、尽きることなく、古希過ぎててもなお、泉のごとく渾々と湧き出て、やむことがない。眠れぬ夜など、以前から抱いている疑問が、沸々と湧き返り、なぜこれしきることが解明されないのか……とじれつたくなる事がある。私は小学校の時は、極めて通信簿が悪かった。その理由は、大好きな理科の時間に学んだ事が頭にこびりついて離れず、次の国語や社会など、全然先生の話が入らない。特に動物の生態や解剖など、非常に興味深く、好奇心にあふれ、次の授業どころか、何日間もその事で、頭が一杯。そんなこんなで、我が家開關以来の超劣等生となり、よくよく母を嘆かせたようだ。

それが高校へ行くと、ますますエスカレート。肝心の学校は、暗記や、進学の点数を取るための授業で、全く面白くなく、とにかく図書館に潜

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 3月15日 荘村清志 ギターリサイタル
- 4月18日 國松竜次 ギターリサイタル
- 5月5日 マヌエル・カーノ コレクションコンサート
- 6月28日 高橋竹童 津軽三味線のひびき
- 7月12日 大萩康司 ギターリサイタル
- 7月26日 大島 直 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465 0299-55-4411

りつばなし。それでも一年生の中はしつかり単位は取っていた。しかし二年生になると、結核性肺浸潤となり、通院と学校と図書館が、ほぼ三分の一ずつ。ついには図書館と通院が半々となり、高校二年は留年となった。

図書館では、文学なども多少はかじったが、熱を入れたのは生物・物理・化学。未知の世界が猛烈な勢いで開かれていく。知的欲求の最盛期に、進学のため、やむをえず学ぶのではなく、目をギラギラ輝かせ、好きなことを学ぶ楽しさ。学校に行かず、多くの人に迷惑をかけたが、本当に充実した高校生活四年であった。青春時代のロスタイム一年。焦りはあったが、今思えば、かけがえない知的充電期間であった。

特に、岩波書店の、厚さ一〇cmもある「理科学事典」は、実に素晴らしく、私の人生を決定づけたとも言える。辞典などは貸し出しをしないので、図書館の中でしか読めない。そのために、学校をサボる事となり、親には心配かけたが、三つ児の魂百までも……。幼い時からの疑問が、次々解けていくあの興奮は今でも忘れられない。

病気も又、有り難きこと。抗生物質のない時代の結核。栄養と安静しか手はない。戦後の超食糧難の時代であったが、我が家は酪農家。貴重な栄養源には恵まれた。主治医と将棋を指し、高校の数学の先生と囲碁三昧。囲碁・将棋は、集中力涵養には最善。留年は家族に迷惑をかけたが、あの感受性最高の時期に、存分に好きなことを学ぶことができ、心から感謝している。生命や宇宙の神秘に、深く触れることができたことは、我が生涯の宝となり至福この上もなし。

【病気に感謝は、もう一度あった。六四歳の時、

何の臨床所見も無しにドックのオプション検査から精密検査の結果、いきなり、レベル最悪の前立腺ガン。超初期。直ちに全摘手術を受け、放射線照射と合わせ、三か月半、大病院に入院。抗ガン剤は一切使わず、痛み・苦痛も全くなし。ガン病棟で毎日読書と、囲碁三昧。五年後の生存率五五％と言われたがどこ吹く風。経過は極めて順調。森林浴セラピーにも優る、超リラクセスの至福の時であった。そして退院後すぐ復職。現在も仕事を続けている。術後八年半経過し、転移などの検査は続けているが、全く異常なし。近代医学に感謝し家族や支えてくれた多くの方々に心から御礼申し上げる。】

やり直し高校二年の時、卒業しても働く事は無理と診断された。ならば進学以外、手はなしと判断。療養しながら猛勉強の末、国立一校の獣医学科へと進んだ。進学後は療養と学業を両立。病気はほぼ回復。無事卒業、獣医師免許取得、茨城県へ入庁。家畜伝染病の発生予防・蔓延防止・畜産奨励等の道を一筋に歩んできた。

先年、古希を記念し、旧友に、今まで本会報に掲載した類の、サイエンスがらみの文集を送った。『高校時代とチットも変わってない』と言われた。確かに子供の頃から私は、唯物史観にとらわれ、どのような偉大な思想も、大脳における生化学反応の結果と信じている。いわゆる「心脳一元論」信者といえる。

【利口な人なら、これほどまでに、自分の全てをさらけ出す事はないであろう。沈黙は金とも言われる。法然上人は、『智者の振る舞いをするな、己の愚かさに気づけ』と教えている。

確かに「信念」というものは、胸の奥で燃やし

続けるもの。人前で喋ったり、書いたりするものではなかるう。しかし愚かな私は、それをやるから、軽佻浮薄と、上人に叱られる。】

さて私には、若い頃からの疑問が幾つかある。その第一は、『物質には、なぜ引力があるのか?』と言う事。バカげていると言われるかも知れないがいつも疑問に思っている。近代科学の祖アイザック・ニュートンは、ケンブリッジ大学生時代に、リンゴの木から実が落ちるのを見て、後に(一六八七年)万有引力の法則として世に発表するヒントを得たという。リンゴが地球に引き寄せられるのも、惑星の運動も、人工衛星の軌道もすべて、ニュートンの方程式により、計算された通りに動いている。

しかし物体には、なぜ「引力」が生じるのか?という素朴な質問には、ニュートン先生も答えてはいない。そんなことを問う私は、幼児並?所が、なんと、世界の第一線の理論物理学者達も、同じ問いに取り付かれ、「引力を生む素粒子」探しを始めたという。フランスとスイスの国境にまたがり、地下一〇〇m、一周二七kmの「大型ハドロン衝突型加速器」という巨大施設。七兆電子ボルトの超高エネルギーで、陽子どうしを衝突させる。日本人科学者も加わり、〇八年九月一〇日、稼働を始めた。その目的は、仮称「ヒッグス」と呼ばれる、引力の根源となる未知の「素粒子」を発見するためである。

【もし、ヒッグス素粒子を人工的に作り出すことに成功したなら、大変な事態が起こる可能性があるという。それは、ヒッグス素粒子が「ブラックホール」に急成長した場合、研究施設どころか、この地球さえも、一気に飲み込む可能

性がある……。ブラックホールは直進する光さえも飲み込み、光は脱出することができないほどの巨大な引力を持つ。まさかそんなことになりはしないはずで、危険を感じたら実験を中止すればよいとの事。】

一三七億年前、ビッグバンの後、一千億個の銀河が形成され、各銀河は、猛烈なスピードで拡散し、互いに遠ざかっている。そのエネルギー源は、現在観測できる宇宙の構成要素からは計算できず、未知の物質（ブラックマター）の強大な引力がなければ、成り立たないという。その未知の物質の謎に迫るためにも、引力の根源となる素粒子を見つけたそうとしているのだ。痴者の戯言（たわごと）のような、ごんぼ堀りの単純な疑問も、根源は、物事の本質を知りたいという心の奥から湧き出たものであり、痴者も賢者も相通じるものがあるのかもしれない。

第二は『進化はそこまでやるの？』という疑問。現在地球上に生存している生物種は、一千万種とも言われる。これらの生物は、いずれも過去に、酸欠・栄養不足・硫化水素など毒ガス充満・小惑星衝突や火山噴火の煤煙などによる日光不足・諸々の天敵など、数え切れないほどの悪環境に対して、体の構造や機能を変換して耐え抜いてきた。

それらの悪環境に、耐えられるだけの変身ができなかった生物種は、恐竜を始め無数に存在したが、化石生物として地上から消え去っていった。我々人類の祖先の大部分も、化石人類として、この世から去っていった。そして幸運にも、わずかに生き残ったアフリカ東部の「化石

人類ホモ・エレクトゥス」から、二〇万年前に枝分かれし、七万年前アフリカを後にして、世界に拡散した現生人類・我々「ホモ・サピエンス」。いつまで繁栄を続けられるか？未来学者は、『運』が良ければ、後一〇〇万年、最悪なら後一万年がよいところ……とも言っている。

天変地異など、大事件があれば、大量絶滅を免れることはできない。古代オルビス紀以来、過去五億年間に、全生物の九〇%前後も絶滅した事件は、五回も発生している。

このように生き物が、しつかり子孫を残すと言うことは、並大抵の事ではない。それ故、種として生き抜くためには、汚い言葉だが、『進化のためには手段を選ばず』と言うことになる。

即ち、郭公の托卵（カッコウなどがウグイスなどの巣に卵を産み、子育てをさせる）。鳥類の擬傷（敵が巣に近づくと、親鳥は傷ついて飛べない振りをして、敵を遠くへおびき出す）。寄生虫の宿主からの攻撃防御システム（例えば人の生き血をすすする日本住血吸虫。人体の化学物質をコートに着て、抗体や食細胞の攻撃を免れる）。昆虫や蛸などの擬態（動物の形・色・斑紋等を他の動植物又は無生物に似せ、敵を欺く）。その他、待ち伏せ、裏切り、横取り、強奪など智慧と業（わざ）を存分に発揮し、利己的に生き抜く。そうしなければ生きてはいけな

い。

人間も自然界の一部。動物の一種に過ぎない。だとすれば、野生動物に劣らぬ生存のための、あの手の手の汚い手を縦横に使いこなす輩のいるのも、生き物の本性の一面かも知れない。詐欺師、ギャング、独裁者など数限りない。故

に、荀子の「性悪説」が出てくる所以であろう。

正義の味方みたいな顔して、原爆を落とし、枯れ葉剤を撒き散らし、全人類を何百回も殺せるだけの核兵器を持つて、他の国に脅しをかけたいしたつもの国もある。世界史上数え切れないほどの、大量虐殺、戦争などなど。人間の進化の方向性は、凶暴な猛獣だったのか？……。

故に人間の本性は、到底「性善説」などからは、ほど遠い感じがする。人類は万物の霊長などと言われるのならば、もう少し凶暴性の少ない、穏和な生物に進化できなかったのか？……。

第三の疑問は、人類の無秩序な繁殖。

殆どの動物は、エサなどの充足状況に応じて繁殖をコントロールしている。カナダの森林狼は、シカなど獲物が少ないと、カップリング数（夫婦の組み合わせ数）を減らし、子供の数を、コントロールする。動物がこのように秩序ある行動をするのに、人類は食料が有ろうが無かるうが、自らを律することができない。なぜこのように進化したのか？……。人類は熱帯が発祥地とはいえ、季節に関係なく、しかも、妊娠中でさえ、その行為を制御できない。食物連鎖の底辺の動物なら、種を維持するため、無数の子を生むのもやむをえないが、人類は自然界において、それほどの弱者とも思えない。食糧難・資源枯渇は目に見えていても、万物の霊長は、人口増に歯止めをかけようともしない。（それどころか、どこかの国では、「少子化対策担当大臣」とかいう役を設けた）。

人類に争いが絶えない最大の原因は、人口過剰である。以前にも書いたが、密度が増せば、生存のための「縄張り」を主張する。縄張り

ぶつつかれば戦となる。もし、人類に「智慧」というものがあるなら、百年先・千年先の子孫が、いかにすれば平穩に暮らせるかを、今きちんと道筋をたてるべきであろう。病弱・倒産など色々事情はあるが、全ては自己責任。目先の選挙得票のための小細工は、小善である。なぜ後藤新平のような、人類の未来を見つめた巨大なヴィジョンを持つ政治家が現れないのか？

さて身の回りには疑問や、未開発技術は無限にある。健康面では、ガン、マラリア、アメーバ赤痢、狂犬病など手強い敵がうようよだ。国連が本当に生きた活動をする気なら、世界の莫大な軍事費の一部を強制徴収し、悪性伝染病対策に回してくれ！マラリアは一〇〇年以上も前に病原体が発見されているのに、対策は遅々として進まず、毎年二〇〇万人以上も死んでいる。

人間が感染したら一〇〇%死亡する狂犬病には「犬の予防注射」という簡単な対策が確立されている。法律で義務づけられてもいるのにそれが守られない。日本では犬の予防注射率は五〇%を割っている。〇六年末、フィリッピンで犬に咬まれた日本人男性二人が、相次いで狂犬病で死亡した。あれほどマスクミがセンセーショナルに報道したにも拘わらず、余り効果無し。予防注射率は上がらない。法治国家が泣く。地球温暖化対策も、国際会議で責任のなすり合い。先進国も発展途上国も、同時多発エゴ。明日の地球を真剣に考えてくれ！化石燃料を使わない発電など未利用資源は山ほど有る。地熱・風力水力波力・太陽熱・原子力等々。

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)

(1000円)

菅原茂美待望の第一作 「遙かなる旅路」(1)(定価:500円)

打田昇三:ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)
(二冊組:1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!
ふるさと「風のことば」(定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ「風邪に押されて」(定価500円)

小林 幸枝「風に舞う」(定価500円)

白井 啓治「移ろう風の中に」(二冊組:800円)

近藤治平「風に吹かれて」(二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館:0299-46-2457

・いしおか補聴器:0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡13979-2(白井方)

電話0299-24-2063

学校教育も、相変わらず進学予備校的。マニユアル通りの事なかれ主義で満足なのか？物事の神秘を深く求める意欲を、もつと激しく湧かせるよう、更に誘導できないのか？愛しい孫達よ、目を輝かせて、なぜ？どうして？と、この爺にもつと食い下がってこい。ごんぼは掘れば掘るほど、人生の味わいを増す。日本列島には、悲しいかなごんぼ掘らず症候群」が蔓延している……。

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話0299 43 6888

母親の居ない「久（ひさ）」は、いつも早起きして朝餉（あさげ）の支度をするのが一日の始まりであった。父親と妹の「仙（せん）」のために粗末ではあるが食膳を整え食事が終われば仙の手を引き畑に出て、妹を遊ばせながら働いている。雨の日には、父親の手元から見よう見まねで覚えた草鞋（わらじ）を作り宿場のお店に卸していた。

久の家は「百姓」と呼ばれる一般農民よりも貧しく耕作地を持たず年貢は労役で納める「水呑み」に分類されているので、畑と言っても家の周りの荒れ地を切り開いた僅かな土地だが、丹精込めて耕せば一年を通して野菜や芋などが得られ親子三人を飢えから救う足しになる。

父親は若い頃から庄屋の作男であり、母親も下働きをしていた。主の粹な計らいで所帯を持ってからは、母親と共に特別に通いの奉公人として働かせて貰っていたので、今でも父親は昼と夜の御飯が庄屋さんの家で頂けるから助かっている。

庄屋さんの家では時々、霞ヶ浦で獲れる魚が食膳に出される。夕食に出ると父親はそれを食わず手拭に包んで懐に忍ばせ、持ち帰って姉妹に食べさせた。娘の喜ぶ顔が嬉しいのである。父親の着物には汗と魚の臭いが染み付いていて、洗濯をするたびに久は気にしていたが、父親の愛情の証しをいっしょか嬉しく感じていた。

村は、魚の種類が豊富な霞ヶ浦に面しており、住民は湖の恩恵に浴せる筈なのだが、水戸藩の領地になっていないため、不条理な話だが領民は魚を獲ることが出来ない。藩が勝手に領内沿岸一帯の霞ヶ浦を「御留川」として独占していたのである。

これは府中城（石岡）に居た大掾（だいじょう）支配の政策を真似た悪法であり領民を困らせた。目の前の霞ヶ浦から魚を得ようとする領民は高い入漁料を払うか、水戸藩領以外の沖（高浜寄りか玉造寄り）でこっそりと漁をした。魚の宝庫を持ちながら魚は地元の高価な食材であった。

主婦代わりの久は未だ十二歳である。母親に死別したのは八歳のときで、優しかった母親の面影は辛うじて記憶の底に残っているが、産後の肥立ちが悪くて死んだ母親の記憶が仙には無かった。久は母の感触を知らない妹が不憫でならない。

幼い久と乳呑み児を抱えて途方に暮れた父親は一家心中を考えたが、健気に赤子を世話する久を見て物乞いをしながらでも生き抜こうと決めた。幸いに庄屋さんが村の女たちに声をかけ、貰い乳が出来る人を探してくれた。久は村人に助けられながら母親代わりで幼い妹を育てていた。

その妹が春先に少し体調を崩した。雨の日も寒い風が吹く日でも久は働く。仙はいつも久と一緒に自分の綿入れも着せて遊ばせていたのだがその晩に熱を出した。風邪引きであろうけれども医者に診せる金は無い。ありたけの銭でやっと薬を買った。久は付ききりで頭を冷やし身体を温めて看病をした。仙がようやく元氣を取り戻したのは、梅が散り桜が咲き始める頃であった。

久の家から遠くないところに霞ヶ浦の浜辺へ通じる道があり、その傍らに建つ小さなお堂には七基の石地蔵が置かれていた。そのうちの六基は手にとれるように小さな地蔵で、後世に村人が安置したものである。真中に置かれた大きな一休だけは少し苔が生えている立派なお地蔵さんで、村人はなぜか「籠抜け地蔵」と呼んでいた。

お堂の周りは地続きの森で太い藤蔓（ふじづる）が絡んだ一本の大榎を取り囲むように灌木が生い茂り、大樹に纏わりつく藤は何かしら人間のシガラミを思わせて因縁があることを感じさせた。

この土地は遥か昔から湧水に恵まれていて森の一部に小さな池のような水場があり、野良に出た村人や通行の人たちは助かっていた。そのせいでお地蔵さんは誰からも有難く思われていた。

地蔵堂の前を曲がると街道から分かれた道が下り坂になり東浦の湖岸に出る。そこは「越番（こしばん）」と言う役人が管轄する渡し場で「越番河岸」が正式な名称のだが、村人は漁場を前にして自由に漁が出来ず、渡し舟に乗るにもうるさい水戸藩の圧政に抵抗する意味を込めて「地蔵河岸」と呼んでいた。番小屋があつて役人が詰め、小舟が二艘、何時も浜に置かれている。

対岸の出島と呼ばれる大きな半島は主に土浦藩領だが井関、石川、宍倉の三村は久の住む村と同じ水戸藩の領地になっていた。本来の目的は水戸藩の役人が公用で使うためのものではあったが井関の八木浜まで有料の渡し舟になっていた。

向こう岸の浜から上がった場所にもお地蔵さんがあると、久は父親から聞かされていた。「子授け地蔵」といって、籠抜け地蔵と同じように本尊の大きなお地蔵さんのほかに、無数の小さな地蔵が辺り一面にあるのだそうで「お前たちも、そのお地蔵さんにお参りをして授かった」と、父親は亡き母を偲ぶように久たちに言った。

久は、渡し舟の代金が払えるようになったら、仙を連れて子授け地蔵にお参りをしようと決めていた。それまでは、代りと言うと地蔵さんに怒られるかも知れないが、願ひ事は此方側の籠抜け地

蔵にしてみよう―仙の病気が良くなりますますように、久は毎朝、籠抜け地蔵にお参りをしていた。

霞ヶ浦（東浦）の一番狭い所で向き合う二つの地蔵堂は共に四月八日をご縁日にしていた。当日に双方の村人はそれぞれの地蔵さんたちに頭巾を被せたり、赤いチャンチャンコを着せたり、野菜や煮物を供えたりして無病息災を願った。

ご縁日に、久はいつもの時間よりもさらに早く起きて筍の雑炊をつくった。雑炊の中は稗（ひえ）が大部分だが、正月に庄屋さんから貰った玄米を思いきって少し使った。仙の病氣回復を祝う御馳走のつもりでもあった。雑炊が出来上がると、久は縁の欠けた茶碗に筍雑炊を入れ、誰も来ないうちに籠抜け地蔵堂の前に備えた。久の供え物が一番粗末ではあったが、気の所為か地蔵が微笑んだように久は感じていた。

久がお参りできる下玉里の「籠抜け地蔵」と、お参りがしたいと願う対岸・八木の「縄とき地蔵」とは、水戸藩の罪人護送に関わる共通の伝説を持っている。この話は、その伝説を踏まえて時代背景を天保年間（1830年代）に設定している。水戸藩領内に住む貧しい少女「久」は、或る日のこと霞が浦湖岸にある籠抜け地蔵の前で子供心には不可解な出来事に遭遇する。その事も二つの伝説も共に水戸藩が置かれた特殊な事情によるものなので、そのことを述べておきたい。

水戸藩領は三十五万四千石余り、河北三郡と呼ばれた現在の茨城県北と栃木県の馬頭地区、そして水戸市を中心とした那珂川流域から酒沼を含んで茨城町、旧小川町、玉造町、玉里村と出島半島の東岸、さらに潮来、牛掘に飛び地が置かれた。

水戸藩はいわゆる徳川御三家で石岡、宍戸などの支藩を含めて藩主は江戸に居り、参勤交代はせず国替もない。しかし尾張、紀伊に比べれば水戸は藩主の官位も低く禄高はかなり少なかった。関ヶ原の合戦後まで水戸にいた佐竹氏は五十四万五千七百六十石もの高禄であった：

参勤交代の制度は、幕府が諸藩の経済力を弱める目的で定めたとされている。それが無い水戸藩は楽な筈だが実際には逆であった。参勤交代をする藩は、国家老以下の重臣が国元に居て、江戸屋敷では「江戸家老」と「留守役」という外交官が幕府や他藩との窓口を務めていれば良かった。

水戸藩の場合は藩主、家老、重臣以下多くの家臣が家族ぐるみ江戸詰めであり、江戸での暮らしは地元より金がかかる。さらに領地がある国許にも規模はどうでも同じような行政機構が必要になるから藩の組織は二重となり、相互の通信・連絡・交通費用が馬鹿にならない。さらに徳川御三家としての格式・体面があり交際費も高張る。加えて第二代藩主の徳川光圀が「大日本史」の編纂という金のかかる大事業を始めてしまった。

江戸時代の諸藩は例外なく財政の窮乏に直面していたが水戸藩は特に酷く年貢の取り立ては厳しかった。久の住む村は米の生産高では藩内五百七十三か村のうち十位以内に入る一九四〇石余を記録していたが、時に霞ヶ浦の水高が増えて田圃が水没する被害もあり決して裕福ではなかった。

しかし農民、漁民が水戸藩の圧政に苦しみながらも村全体は霞ヶ浦の水運業に携わるなどの工夫と努力を重ねていた。この村は在来の豪農や努力家が多く、久のような極貧の家族が暮らせていたのも居住環境が恵まれていたからであろう。

財政問題と共に水戸藩の癌となっていたのが人問題である。江戸詰めの家臣と国元（領地）に居る家臣とが対抗意識を持つのは仕方のないことだが、水戸藩には藩の創設時から対立抗争の火種となる大きな要素が存在していた。明治維新に際して天狗党事件など多くの犠牲者を出した藩内抗争の遠因は水戸藩が出来た時点で遡る。

慶長七年（1602）五月、徳川家康は常陸国に根を下ろしていた佐竹氏を秋田へ移したあと、江戸城の北の備えとなる水戸城の重要性を考慮し配置する武将の人選に苦慮していた。近辺には佐竹に心を寄せる者が残っており、これを抑えられる城主が必要である。家康が最初に選んだのは徳川四天王の一人榊原康政であったが、康政は思うところがあつて辞退し館林十萬石に留まった。

その年の十一月、家康は五男の信吉を二十五萬石で水戸に封じた。当時は二十歳、関ヶ原の合戦では江戸城を護っていた武将であるが身体が弱かった。この人は織田信長に滅ぼされた武田の名跡を継いで武田信吉を名乗っていた。母親は武田信玄の義理の孫に当り、武田氏や佐竹氏と祖先を同じくする秋山越前守虎康の娘と言われる。信吉の夫人は豊臣秀吉の正室「ねね」の弟の孫である。豊臣や佐竹に心を寄せる者も抵抗しにくい。

家康の策が当たったのかどうか、水戸に残留した佐竹の家臣も多かったようだが、武田信吉が水戸城主となっても特別な騒動は起こらなかった。信吉と共に「見性院（けんしょういん）」と呼ばれた養祖母に当る女性が水戸城へ来た。余談だが、この人は徳川二代將軍の秀忠に頼まれて、正室・お江の方の嫉妬迫害から庶出の幼子を護った。後にその子が徳川時代屈指の名君と称された初代

会津若松藩主・保科正之になるのである。

武田信吉は、水戸城に入って一年もしないうちに病死してしまった。子供が無かったので水戸城では主を失うと共に、甲州の名門・武田家も消滅したことになる。信吉には武田の遺臣が家臣として付けられていた。穴山梅雪の家来と、家康に拾われた武田の武士たちである。

梅雪は武田信玄の姉を母とし、妻は信玄の娘であるから武田氏に最も近い武將だが、早くから家康に接近していた。そのため悪人のように言われているが人物としては優れていたらしい。梅雪は本能寺の変の時に家康と一緒に居て避難途中で賊に殺害された。見性院は梅雪の夫人である。

信吉の死後、水戸城では「梅雪の家来が主君の威光を笠に威張って不正を働いている」として武田系の武士たちに訴えられた。幕府の採決で不正は事実とされ、重臣四名が追放された。これが水戸藩最初の内部騒動であった。

信吉の後に水戸城主に据えられたのは、家康の十男・頼将（よりのぶ）頼宣である。二十五万石の城主と言っても頼将は未だ幼年（一説では乳幼児）であるから家康と一緒に駿府城に居て水戸へは来たことがない。元和五年には五十五万石の太守として和歌山へ移ることになる。水戸はこの時から君主不在の城の宿命を背負う。

それまで初めは伏見城に置かれて、家康の居城としての改修が終わってから駿府城に移ったのは家康の末子・頼房である。水戸系の史料では「家康が最も寵愛した」とあるが、それは幼少だったからで、家康は頼宣に最も期待していたらしい。

慶長十年、形だけではあるが徳川頼房は常陸下妻十萬石の城主になった。その頃から家康は頼宣

をエリートコースに乗せて近畿・東海の要地に据え、後釜には末子の頼房を充てる構想だった。

慶長十四年、頼宣は二十五万石が倍になって予定どおり駿府城主となった。その穴埋めで頼房は下妻から水戸へ移された、とは言っても名目上のことで藩主・頼房は江戸城にいた。禄高は二十五万石に増えたから喜ぶべきであろう。

頼房が水戸へ来たのは家康が死んだ後である。その間は、藩主は決まっても幕府直轄地のようない形で代官やら武田の遺臣らが管理していたらしい。水戸藩に新規採用されたのは滅亡した武田・北条・今川・別所など戦国大名の遺臣、佐竹の臣、初代城主・信吉の家来、土豪の一族から関ヶ原合戦で改易された諸大名家の浪人たち、そして少数の徳川の家人など種々雑多であった。

母親が同じ兄・頼宣の禄高が五十万石以上に増えたのに、頼房には二十五万石に僅か三万石の増加しかなかった。三十五万石にしたのは自分で「高直し」をして帳簿の数字を足しただけで、一文の得にもならない。これにより領民の年貢負担が増えて多賀郡内では検地反対運動が起こり、庄屋一族が磔（はりつけ）にされている。以後、領内の反対運動は何度も起こった。水戸藩は禄高の面でも家臣の内容でも幕府からは優遇されておらず、東北抑えの大役のみを負わされていた。

水戸藩が他藩とは異なり参勤交代をせず江戸詰めとなり「徳川御三家」とか、冗談でも「天下の副將軍」などと言われるようになったのは三代將軍・家光の配慮からであろう。父母から嫌われていた家光が將軍になれたのは春日局の力とされているが、実際には家康の側室で才色兼備男勝り戦場へも従った英勝院お勝の方のお蔭なのである。

この女性は家康の命令で初代水戸藩主・頼房の養母となった。太田道灌の子孫と言われている

家光は、弟（保科正之）を護ってくれた見性院にゆかりがあり、且つ英勝院に繋がる水戸藩を大切に思い、光圀は將軍の名の一字を与えられた。そうしたことが水戸藩に幕府への忠誠心を強固にさせたが、光圀は明国から亡命してきた朱舜水（しゆしゆんすい）を水戸に迎えて朱子学に傾倒し下克上、群雄割拠で低下した「君臣の大義」を重んじる「水戸学」を振興させようとした。

幕府の権威と朝廷の威光とは相入れない要素がある。幕末の水戸藩は「御三家の誇り」と「尊王攘夷の家元」と言う矛盾を抱えたまま揺れ動く時流に翻弄され、空しい大義名分に拘り続けて対立抗争を繰り返した。破綻した経済による困窮は人心を荒ませる。藩の草創期に集められた言わば「敗者復活」の者を祖先とする藩士たちは目に見えない怨念に引きずられ、抑圧し続けた農民を巻き込んで水戸藩を奈落の底に沈めてしまった。

名君として光圀と並び称される烈公こと斉昭は部屋住みの三男から、一部の家臣団に擁立されるようにして第九代の水戸藩主となった。先代の斉脩（なりのぶ）に子が無く、夫人の峯姫が第十二代將軍・家斉（いえなり）の娘だった関係から重臣たちは將軍家から養子を迎えることを考えた。

幕府からの多額の下賜金で困窮した藩の財政を立て直す考えだったようである。苦肉の策ながら大局的に見れば悪い案ではなかった。その策が実現していれば水戸藩は徳川家との血縁が二重になり御三家筆頭の大藩になったことであろう。

これに対し狭い見から「血筋の大義名分」を楯に反対運動を展開したのが中級・下級武士団で

あった。その背景には歴年に亘り抑えられ続けてきた上層部への恨みがあり藩創設期の寄せ集め人事の欠陥が二二十年経って噴出したのである。

結局、斉脩の遺命で藩主・斉昭が実現したのでが派閥の違う主君は重臣たちに軽視され続けた。

文政十二年に水戸藩主になってから十数年間で、斉昭が行った人事の改革、役職者への説諭から家臣の命令無視、さらに職場での対立紛争などの事例が三十件以上も記録されている。いずれも藩主・斉昭に対する重役たちの抵抗が根底にあり、主君への忠節を第一とする藩では有り得ない現象である。事件の度に多くの武士が処罰された。

徳川斉昭は天保八年に刑罰制度の改正を部下に検討させた。実務に当る郡奉行（こおりぶぎょう）は藩士の罪人が増えている現状に厳しく対処するため、従来の領内追放以下の刑は「徒罪（懲役）」とし、その期間の最長を三年とするように意見を具申したのである。この案に対し重臣たちは悉く反対を唱え、徒罪を水戸から五里四方追放にして刑期も一年に減らした案で採択した。

石岡市史に「…（水戸藩の）追放所は三か所もあったがその一つが、宍倉島（石岡市大字井関字八木）である」と記されているが、これは追放所では無く「徒刑の地（刑務所）」だと思われる。追放者が労役に付される筈は無い。

「追放刑」は「特定地域からの追放」であり、居住禁止区域外で大人しくしていれば良かった。追放刑にされた者でも「領内通行」は許されたので、悪知恵の働く奴はいつも旅支度で家に居て、咎められたら「通行中」と答えたらしい。

北部に多い水戸藩の領地で僻地に相当するのは南の端である。特に霞ヶ浦を挟んで対岸にある石

川・井関・宍倉などの村は陸続きだが島と見做され宍倉島と呼ばれていた。そのため、八木に水戸藩の徒刑地が流刑地が置かれていたのである。

徒罪で宍倉島に送られる水戸領の者は陸路を地蔵河岸こと越番河岸まで籠で運ばれ、そこからは手鎖、腰縄の姿で歩き、渡し船に乗せられた。久の時代には、その制度が絶えていたとも言われるが、水戸藩の政情を考えると皆無とは思えない。

罪人が乗せられる籠は、割竹で編んだ頑丈な鳥かごのような唐丸籠（とうまるかご）だが、武士など身分の有る者は錠前付きの専用籠が使われたようで、籠の上からは青い網が被せられ罪が軽いほど青色が薄かったという。警察用語で「あいつは白だ！」というのは、その名残かも知れない。

アメリカの軍艦が浦賀沖に現れる数年前の天保十四年五月、水戸藩の盗賊改奉行は沿岸防衛に頭を痛める藩主・斉昭の意を汲み、藩内治安の引締めを図る目的から領内追放などの刑罰を徒罪（八木などの徒刑地送り）に改める案を具申した。郡奉行の意見を聞いた斉昭はこれを採用した。

そうした世情も藩内の対立抗争も水呑み百姓の娘・久には関わりが無く、着たきりの着物で朝から晩まで働き、粗末な食事が得られる暮らしの繰り返しが続くだけであった。

お地蔵さんの御縁日に当るその日、妹の仙が元氣を取り戻したお礼にと、いつもより朝早くお参りをし、筒雑炊を供えた久は地蔵堂の周りの草を抜いたり、誰かが供えた水を換えたりしていた。太陽がぐんぐんと昇りはじめて、キラキラ輝く霞ヶ浦の湖面が今日も美しい。野良仕事に出る村人の姿も見かけるようになった。

地蔵堂にも陽がさして地蔵の顔は石仏ながら神々しく感じられる。その顔を拝みながら久は母親のことを思っていた。母親が生きてさえいれば、貧乏暮らしでも妹の仙に、もつと違う形の幸せを与えることが出来たのではなからうか：

もう一度、頭を下げて地蔵堂を去ろうとした久は小川から高浜へ通じる街道を進んで来る七、八人の行列に気づいた。途中迄は久の家の方角なので、そのまま行けば行列に会うことになる。一行には青色の籠が付いている。久は身分のあるお侍が来るのであろうと、その場で待つことにした。

久は知らなかったが、行列は刑罰の地に送られる武士の網籠と警護の者たちであった。警護の役人が徒歩で罪人が籠と言うのは矛盾するようだが唐丸籠と同様で頑丈な竹で編まれた籠は座ついても足が痛い。籠の中央に太い柱があり、罪人は手と足を鎖で縛られた上に柱に括られているから普通に歩いたほうが余程、楽なのである。武士は幾らか違うようだが、罪人は食事も大小便も籠の中で済ませられたという。

行列が近づいたので、久は地蔵堂の前に座り頭を下げていた。往來の邪魔にさえならなければ普通にしていた良かったのだが、相手を知らない久は、以前にお代官だか郡奉行だかが巡見に来たときに父親が土下座したのを思い出したのである。

役人は久の存在など気にかける様子も無く地蔵堂の前で足を止め何かホッとしたような様子で籠を下ろさせ、いきなり「出る！」と籠の中へ命令した。久は自分が言われたのかとビックリして顔を挙げたのだが、誰もこちらを向いていない。

籠の一行とは別に、浜辺のほうからやはり役人らしい服装の者が何人か上がってきていた。河岸

会所に詰める下役や使用人たちで普段は密漁の取締などを行っている。役人たちは籠を取り囲んだ。

青い網が外され戸が開けられた籠から、やっとのことで出てきたのは、身体を幾重にも荒縄で縛られた若い男であった。後ろ手に縛られているうえに長い時間を窮屈な姿勢で置かれた男は、籠から出て直ぐ立ち上がることができず、その場に崩れるように座り込んだ。久は異様な光景に驚き、地蔵の陰に身をすくめていた。

「ご定法に基づきこの場にて籠抜けを許す。以後は越番殿の御宰領にて渡し舟により徒刑地に向かう。到着まで神妙に致すように！」

送ってきた役人が大声で言うのと、縛られた男が「お手数をおかけする…」と力なく答えた。その人は武士なのか町人なのか、伸び放題になった髪と髭が見えただけで久には判断できないが、青白く端正な顔立ちをしていた。言葉遣いからは身分の有る人のようにも思える。

「この人はどの様な罪を犯したのだろうか？」久は考えていたが、凶悪な罪を犯した人物には見えない。かつては籠で運ばれて来る囚人も多くいたようだが、ここ何年もの間は途絶えていたので珍しく、村人が集まってきた。

「暫くぶりで籠抜け地蔵様が戸惑っておいでなさる…」見物の誰かがおどけて言った。役人の一人が睨むような顔を向けたが何も言わない。その話から久は「籠抜け地蔵」の意味を知った。

遠くから運ばれて着た囚人たちは、このお地蔵さんの前で籠から出される。しかし、それで救われる訳ではない。縄を掛けられたまま、浜辺まで歩き、渡し舟で対岸の刑地へ運ばれるのである。

「囚人」なのであろうが、籠から出された男の

人の疲れ切った様子になる久は、地蔵堂から出て村人に交じり見物の輪に加わった。

地蔵堂まで籠を運んで来た役人たちは、河岸の方から来た役人に一礼して一歩下がった。河岸の役人がうずくまっている男に「立ちませい！」と声をかけた。しかし動けない。役人が駆け寄って今度は乱暴に「立て！」と怒鳴り、二人がかりで男を引き起こし歩かせようとした。

囚人は、やっとな顔を上げ「…水を飲ませてくれぬか…」と嘆願するように言った。役人は「向こう岸へ着けば飲める！」と冷たく言い放って取り合わなかった。囚人はガツクリとしてその場にしゃがみこんでしまった。役人は無理に引き立てようとしたが動かない。見ていた久は無意識に地蔵堂の池まで走り、お地蔵さんの茶碗を借りて水を汲んできた。

「…水…」久が差し出した茶碗を見て囚人は生き返ったような眼をしたが、それを見た役人は「ならぬ！」と怒鳴り久を止めようとした。

「飲ませてやれ！」「そうだそうだ！」村人が一斉に騒ぎ立てたので、役人は仕方無く久が水を飲ますのを黙認した。

「これは、お地蔵様の水です」と久は言った。夢中で茶碗の水を飲みかけた囚人は、気が付いたように久に頭を下げ一気に飲み干した。飲み干すと同時に役人が囚人を急ぎ立てて船着場の方へ連行しようとする。

地蔵堂の前から船着場へ行く道は街道とは違いいり下り坂で砂地になっていた。男は身体が弱っているようで足許が覚束ない。役人が押さえていた手を離すと、よるめいて砂に足をとられる。

「危ない！」と久は思った。その瞬間、久は反

射的に駆け寄り、囚人と呼ばれる男を小さな身体全体で止めた。普段、畑仕事で培われた体力は体格の差をびくともせず支えていた。久が受け止めなければ男は前向きに転倒して、頭から地面に倒れるところだった。

見物の村人たちは、感嘆して「おお！」と歓声を上げたが、役人は「余計なことをするな！」と久を睨みつけてから乱暴に押し退け、数人がかりで強引に囚人を浜辺へ連れていった。砂道には囚人の足跡が轍（わだち）のように残った。

「ありがとう…」役人に引きずられながら男は久のほうを振り返って礼を言った。髭面は汚れていたが、その目は綺麗に澄んでいた。

「この人は罪人では無い…」と久は思った。「あの人は、どうして連れてゆかれるのだから？どんな悪いことをしたのだったか？」久は見物していた顔見知りの小母さんに訊ねた。

「…久ちゃん、あの人はお侍だつて。良くは分からねえが今、水戸のお侍さんたちは、難しい理屈を振り回して争っているちゅうからな、悪いことしなくても偉い人に逆らったりすると皆、罪人にされちまうんだつて…まあ、おらたち百姓からすれば、年貢を取り立てて威張りちらしている侍はみんな罪人みてえなもんだけんどもよ…」

小母さんは久が告げ口などしないと安心していうから、鬱憤晴らしに過激なことを口走った。久は何人かの村人の後を追って浜辺まで下りていった。既に河岸役人と囚人とが二艘の渡し舟に乗りこんでいる。間もなく役人の合図で渡し舟は地蔵河岸を離れた。これから二十分ほどかけて対岸にある八木の舟場に向かう。護送してきた役人たちは舟を見送り、さっさと引き上げていった。

八木の舟場には別な役人が待ち構えていて、囚人は河岸から少し登った小さな山の麓に置かれた徒刑場に収容されるのだと言う。

「まあ、おらたちも楽ではねえが、あのお侍にはこれからが地獄さ……」小母さんも気の毒そうに呟いた。その言葉で久の感覚は現実に戻り、急に家に戻った。既に父親も妹も起きていて久が籠抜け地蔵にお参りすることは知っていたが、余りに帰りが遅いのを案じていたようである。

駆け寄った妹を抱きしめながら、久は父親に浜での出来事を知らせた。庄屋さんの家に働きに行く父親は「……お前たちのお祖父さんがそういう話をしていたが、また囚人が送られて来るようになっていたんだか……」と無表情に言っただけだった。

「舟で連れて行かれたあの人はどうなってしまうのだろうか……」久は浜での出来事が気になって仕方がない。説明してくれた小母さんは「お侍はみんな罪人！」と言ったが、悪い人ばかりではないであろうと久は思っていた。

八木の徒刑場に送られた囚人たちは、宣告された期間を働いて過ごす。山林の手入れ、野良仕事、漁業の真似ごとから手内職のようなことまで自分に合ったことをさせられる。筆の立つ者は村の記録書きなどもさせられた。囚人小屋は狭いけれど雨風を凌ぐことが出来る。粗末だが衣服と食事は支給された。囚人を賄う食糧などは周辺領民の負担であり久の住む村にも割り当てがくる。

凶悪な囚人は此処に送られて来ることも無く何処かで処刑されてしまうが、八木に来てからでも反抗したり脱走を図ったり或いは凶悪な余罪が発覚した者は裏山で斬罪に処された。その反面、藩内に身元保証人が居る者は監視付でも比較的に自由

は得られ、囚人全員がそれぞれの刑期満了で出所できた。刑期の最長は三年だったようである。

水戸藩は、戦国時代から常陸国を独占していた佐竹一族が秋田へ移された後に置かれた藩なので、時に反抗する佐竹残党の刑場として八木の地が充てられていたというが、初期の水戸藩は領内の抗議運動には領民にも過酷な裁きをしてきたから反抗した者が徒刑で済まされたとは思えない。八木徒刑場には職務上のミスを犯したか、派閥抗争の敗者などが収容されていたのであろう。

小規模な刑務所のような小屋の前には浜から上がってくる道端に、久が父親から聞いて何時かはお参りしたいと思っただけの「子授け地蔵」が対岸の籠抜け地蔵と同じように祀られている。霞ヶ浦の湖岸でも山王峰と呼ばれる小山の麓にあるので籠抜け地蔵よりも周囲の木立が深い。山王峰には山王神社が鎮座していたと伝えられるが、民間信仰を軽視する水戸藩は神聖な山を刑場にした。

舟から下ろされた囚人は、地蔵堂の前まで来て縄を解かれ手鎖も外され、やっと身体の自由が得られるのである。そのため、地蔵の名は「縄とき地蔵」なのだが、囚人が送られて来るのが暫く絶えていたため縄とき地蔵は何時の頃からか村人が「子授け地蔵」に変えて信仰していた。

子授け地蔵の名にも謂れがあつて、村に住む妊婦で出産予定日の間近に一人で地蔵堂の前を通りかかった者が急に産気づいた。やっと地蔵堂の中に入り込み一心にお地蔵様を拝みながら無事に出産が出来たというものである。

幸いに通りかかった農家の主婦が居て、程なく母子ともに無事に保護された。出産した女性はお礼としてその場で自分がしめていた岩田帯をお地蔵さんに供えた。その話が広まって、妊婦たちが安産祈願で岩田帯をあげていたが、それが袋縫いの紐に変わり、色とりどりの紐がお堂の格子にぶら下がるようになった。近隣の妊産婦は、お堂から紐を一本だけ借りて、無事に出産が済んでから紐を二本にして返す風習であつたという。

子供が生まれる度に紐が一本ずつ増えることになるのだが、子供が欲しくても生まれない夫婦には縁のない話である。それでは不公平だと考えた者が、子供を授かりたい一心で縄とき地蔵の前に小さな石の地蔵を置いて祈った。

その効き目があつたか偶然なのか、夫婦に子供が授かった。そこで紐になぞらえて供えた地蔵を一对にして返した。それ以来、久の両親も含めて子供の欲しい夫婦は、小さいお地蔵さんを借りてきて夫婦の寝床に置き、子宝が授かったならば一对で返すようになり、何時の間にか縄とき地蔵の周りには小さなお地蔵さんが数え切れないほど置かれ、無理に「子授け地蔵」にされてしまった。

囚人は、子授け地蔵と縄とき地蔵の前から徒刑場役人の管理下に置かれるのだが、久の時代には絶えて徒刑者がなかったため徒刑場も二人の下役が実のんびりと小屋の管理だけをしていた。そこへ、急に一人だが囚人が送り込まれて来たので二人は慌てた。どのように扱ったら良いのか分からぬ。取り敢えず舟番役人から身柄の引き渡しを受けた。そこからは自分たちの責任になる。

徒刑場の役人にとって一番心配なのは囚人の脱走である。申し送りでも渡された書類には身元引受人の名前が記されている。それを見た役人は少し安心をした。身体も弱っているようだし、身元保証人は藩の高官である。まず脱走の心配はない。

そうなる、この囚人も身分のある武士なのである。二人の役人は謙虚に、と言うよりも困り果てて今後はどうにすべきかを囚人に聞いてみることにした。実に賢明な方法であった。

「それがしは決して逃げ隠れは致さぬ：ここに来たのも何かの縁でござろう：宜しくお願い申し上げます：籠で送られてくる間に少し身体を壊しているが、回復次第にどのような仕事でも致す所存でござる。暫くの間、休ませては頂けぬか：」

「ど、どうぞ、お休みください：」二人の役人は小屋の中に薄い夜具を敷いて囚人を寝かせた。数日経つと囚人は元気を回復して、自分から小屋の回りの片づけなどを始めた。食事の支度は地元の人頼みであるので、その日から一人分を増やして貰えば良い。こうして監視する者とされる者同士が、あれこれ相談しながらの共同生活を始めた。久が小母さんに聞かされた地獄の暮らしは避けられたのである。「籠抜け地蔵や子育て地蔵のお加護が得られた」と考えた方が良い。

囚人は、久が予想したように武士で、地位もある人物だったが、その罪というのが奇妙なもので当時の水戸藩ならではのものだった。

中・下級武士団に推されて水戸藩主となった徳川斉昭は、藩に巢食う老臣たちの抵抗にあいながらも多くの改革を成し遂げた。しかし、過ぎたるは及ばざるが如く、時にその施策が過激に走ることもあった。外国の侵略に対する海防の面では領内の寺院の鐘を供出させて大砲を鑄造したり、武士以外の領民を徴兵し、獵師を訓練して火器の部隊を編成したりと、第二次大戦末期の日本軍閥が行ったことを先取りしていた。

宗教の面では、儒教の水戸藩は神社仏閣や行事

に対して統制を強め、新年の門松・仏事・法事を禁止或いは制限し、庶民が地域に依拠して自主的に祀っていた神社に氏子制を押し付け、寺院を破却して床下から火薬の原料を採取し、庶民信仰の道祖神などを嫌い撤去させるなど藩が押し付けた唯一神教以外の宗教弾圧も行っていた記録がある。途絶えていた八木徒刑場に送られた武士は、その藩の政策の行き過ぎに反対したのである。

「庶民には庶民の生き方がある。厳しい年貢を納めさせている上に、武士と同じような任務を課したり、日常の行事までも制限することは庶民の生きる希望を失わせることになる：」というのが藩主に具申した意見であった。

これに対して「国家危急存亡の時に武士も庶民も無く、命を賭してもご奉公すべきである」というのが改革派重臣などの見解であった。それならば武士は何のために存在するのか――

水戸藩の、この過激な施策はやがて幕府の嫌うところとなり、弘化元年五月六日、府中（石岡）など支藩の藩主が幕府の使者（將軍の命を受けた上使）となり、小石川の水戸藩邸に遣わされた。水戸藩主・徳川斉昭は藩政の不都合により致仕（辞職）謹慎処分を命じられ、駒込の別邸に幽閉される身となってしまった。

代わって第十代の水戸藩主となったのは十三歳の慶篤（よしあつ）である。光圀の兄・頼重を祖とする四国・高松十二万石の藩主を始め府中（石岡）藩主などが後見して水戸藩は存続した。

斉昭の方針に従って強引な改革を進めた重臣たちは罷免され新しい人事が発令された。これに関連して八木の徒刑場に収容されていた武士も一年で放免されることになった。後見人の配慮で馬が

回され、高浜から府中を経由して水戸へ帰り元の職務に復帰した。

久はあの日に見かけた囚人のことが気になっていたが、日々の貧しい暮らしに紛れて、いつしか記憶の中では奇妙な夢だったように思っていた。夏の盛りのある日、仕事から帰って来た父親が心配そうな顔で久に問い質した。

「久よ、庄屋様が明日、お前とお仙とを連れてくるように仰せたのだが、何かお叱りを受けるような悪さをしては居ねえな？」

「：」久には何も心当たりはなかった。久とお仙は翌朝、父親と共に庄屋さんの家へ行った。父親は心配だったが娘を裏口に置いて仕事に就いた。姉妹の顔を見た庄屋さんは「おお、良く来た」と二人を呼び寄せ、お菓子を持ってくるように言いつけた。遠くから見ていた父親は少し安心をしたようである。庄屋さんは久に言った。

「久よ、お前は去年の夏に浜へ連れて来られた囚人のお侍に優しくしてあげたそうじゃな？」

言われて久は夢のような出来事を思い出した。

「：おらは、男の人が水を欲しがったからお地蔵さんの茶碗を借りてお水をのませたけんど：」

「うん、実はな、その囚人だったお侍が許されて水戸へお帰りになられたのじゃ。その方はお偉い役に就かれておいでなのだがお久の親切が有難いと仰せられてな：何か望みの褒美を下さると言うのだが：お久は今、一番何が欲しいかのう？」

「別に欲しいものなどねえけんど、出来たらはお父ちゃんとお仙と三人で、向こう岸の“子授け地蔵さん”にお参りがしてえ：」

「ん！そんなことでもいいのか？」着物でも欲しいがるかと思っていた庄屋さんは、拍子抜けしたよ

うな顔をしたが、少し勘違いをして「子授けには早すぎないか」と聞きたいところを「…なぜ、子授け地藏さんなのだ？」と聞いた。

お久は真剣な表情で「お父ちゃんと死んだお母ちゃんがお参りして、おらとお仙が授かっただ：そんで、お礼がしたい」と答えた。意味が分からない妹も一緒に「うん」と返事をした。

感心した庄屋さんは深く頷いて「分った。それならば近いうちに向こう岸へ行けるようにしてあげよう。お侍さんには、そのようにご返事をしておこう」と姉妹の頭を撫でながら言った。

それから十日ほどして、父親は庄屋さんから向こう岸の村まで行く用事を言いつかり、三人分の渡し舟公用鑑札を貰って来た。

「お久、お仙、庄屋様から渡し舟のお許しを頂いたから、明日は子授け地藏さお参りにゆぐぞ」

お久もお仙も飛び上がって喜んだ。嬉しくて良く眠れなかった久は、眼をこすりながらも翌朝はいつものように起きて朝の支度をし、弁当の芋を蒸かした。父と二人の娘は、朝一番の渡し舟に乗せて貰うように浜へ下りて行った。

舟には乗り合わせの客は居らず、貸切舟のように朝靄の残る湖面を対岸へ向かった。久と仙とは、西のほうに見える筑波山や眺め通せる両方の湖岸の景色などに見とれてる。父親も滅多には乗れない渡し舟の乗り心地を楽しんでいた。舟の上からは霞ヶ浦で泳ぐいろいろな魚が見える。それを見て久は驚いた。こんなに魚がいるのに、村人が漁に出られない理由が良く理解出来ない。

「…魚がうんと泳いでいるけれど、なんで村の人が不自由しているんだべな」と呟く。父親は気を使って久の頭を抑え船頭さんに詫言った。

「それはな、水戸のご領内でお金が無えからタダでは獲らせねえのさ：困ったことだなあ！」父親に代わって船頭さんが答えてくれた。顔見知りの船頭は気を利かして普段よりもゆつくりと竿を差してくれたから、舟は予定の二十分よりも大分遅れて向こう岸に着いた。

八木の船着場になると、目の前に縄とき地藏堂がある。久は妹の手を引いて駆け上がるように地藏堂へ向かった。父親は船頭に厚く礼を述べてから姉妹の後を追いつ、普段とはまるで違う対岸から見る故郷の村の景色を楽しんでいる。

久は村の道端から手折ってきた花を地藏に備えてから両手を合わせて妹の病氣回復と自分たち姉妹が生まれたことにお礼を述べた。仙も同じようにしている。父親は亡き妻のことを偲んでいた。

「…率爾（そつじ）ながら」背後に声がして徒刑場の方から四人の武士が近づいて来た。振り向いた久の顔を見て「…おお、やはりそなたであった：」身なりの立派な武士が声をかけ、他の三人は片膝を着いて傍らに控えた。

久たちは一瞬、ビククリしたが、父親は習慣でその場に平伏しかけた。「そのままに！」武士が制して久に近づき「…あの時の地藏さんの水は美味かった：有難う」と言った。その言葉で久は去年の夏の出来事を思い出した。

籠抜け地藏の前から囚人舟で此処に送られて来たのはこのお侍だった。庄屋さんの言われたことは本当だった。「良かった」と久は思った。

「あの折は、そなたや此処に居られる二人の番役の方に親切にして頂いた。今日はお礼に来たのだが、何か望みはないか？」武士は久に言った。「…それなら庄屋さんに言うて、こうして三人

でお地藏さんのお参りに来させて貰った：」

「それは庄屋殿から聞いておるが、この私にも何か礼をさせて欲しいのじゃ：欲しいものが有るのではないかな？」

急に久の眼が輝いて思いついたように言った。

「…そんだったら、村の人たちが魚を獲れるようにして貰いてえ：」その言葉に父親は顔色を変えたが、武士は尤もだというように頷いた。

「地元の漁を禁じて居るのは確かに良くないと私も思う。急に改めるのは難しいが折を見て誰でも魚が獲れるように殿様にお願ひしてみよう：」

久はコクリと頷き嬉しそうに笑った。武士は懐から紙に包んだ銀を無理に父親に渡し、番役人と久たちに頭を下げてお供と馬で去って行った。

久たち親子は、晴れ晴れとした気持ちでもう一度、縄とき地藏にお参りをしてから、父親が庄屋さんから言いつかった用事を済ませ、夕方まで対岸の村を見物した。滅多に寄ることも出来ない茶店で饅頭を買って貰った久と仙は嬉しくて嬉しくて何度も「父ちゃん有難う」と言った。

藩主・斉昭の引退で急激な改革路線から一歩後退した水戸藩は、守旧派が力を得る一方で急進派が斉昭の復権を画策して騒然たる有様であった。少年藩主の慶篤はお人好しで両派の主張を聞いてはどちらにも「良かろう」と答えたと言われる。

時代は緊迫の度を深め何時の間にか斉昭が復権して水戸藩は尊王攘夷派と開国佐幕派が憎み合い潰し合う過激な藩となり、久に会った武士も若くして命を落とした。久が子供心にも村のためにと望んだ「霞が浦の魚が領民のものになる」日は、二十数年後の明治維新まで実現できなかったのである：久たちの消息は伝わらない。

私の故郷には数えきれないほどの道がある。林に、田畑に、浜沿いに足で自然に踏み固められたり、人の手で造られたりした道が通っており暮らしの流れをつくっている。古文書にも名が記されている道が四つある。小川街道（府中街道）、円妙寺街道、市海道、江島道である。

それぞれの道には出発点があり、いろいろな道と合流したりまた別れたりしながら目的地に向かっている。そして名がつけられる。そんな道をはどんな思いを持ちながら通っていたのだろうか。時代の必要性で造られた道も必要がなくなれば人が通ることもなくなり、そのうち忘れられて、草木に覆われて無くなってしまふ。そして、また新しい必要が出来て道が造られる。

私にとって忘れてほしくない道がある。それは古書に綴られているわけでもなく、尋ねても知らないという人ばかりであるが、私にとつては縁ある小寺の名の付いた道である。

それは「昭光寺街道」と呼ばれていた。その道のことを母から聞いたのは、まだ娘時代、昭和三十年代のことであった。母は姑から聞いたと言っていた。

祖母は、明治の中頃この地に嫁に来て昭和二十三年に亡くなった。母はこの地に昭和十三年に嫁いできた。祖母と母と一緒にいた時間は十三年から二十三年の十年間だった。その間に、

「昭光寺街道という道があったのよ。お詣りして歩く道だったそうよ。小川から成就院、大宮神社、雷電宮、昭光寺観音堂そして館山神社から高崎を通ってその先どこまで続いていたのかしら

ね」

という話をはっきり覚えていて。その後部落の姑さんお母さん達と観音詣りをして歩いたことが、聞いた話をより深く記憶させてくれたと思う。

年に一度、一月だった。女衆は昭光寺を取りまく部落の人達で境内の観音堂に集まった。賽銭と米一掴みをあげ鐘を鳴らして詣る。その時は何を願ったのだろうか。雷電宮の石段は後で解ったことだったが、十三段、三十三段とあつて女の厄年の数だという。その後この石段を上がる時の思いが変わった私だった。この塚を降りると大宮神宮への参道があつた所だがもうそのおもかげはない。

昭和二十年代迄は牛、馬車が通り糞を散らしたり、野良仕事への男女が通っていた。周囲の森は大正中期から昭和初めに開墾され田余小学校の増築、校庭が造られてやがて参道は形がなくなつた。

十八人の女達は四つ五つの固まりで世間話をしながら歩いて行く。大宮神社の左奥の石室の中に男根があつて、それをお詣りする。その頃の私は気恥ずかしくて正面を見られず目をつむって首を下げるだけだった。

左に見える玉の井では中学時代学校の授業として田植えから稲刈りまでした所だった。坂を登ると成就寺の観音堂で詣った。

「ここはエロ観音だ」

と女達は大声で笑っていた。何となく解るような気もして合わせて薄笑いをしたのを覚えている。

星黒池から小川町に入り、川岸の観音堂に詣って休んだ。その頃は丁度昼時になる。そば屋に入ったり買物をして町でゆつくりした。この日の為に小銭を貯めておいて家族の物をもとめていた。自分の物より親や旦那、子供の物が主だった。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2 1 5 8 6
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

世間話にも入れずただ後をついて歩くだけだったが、女の人達の休息の時間とも思える楽しそうな表情を見ながら何かを感じていた私がそこにいる懐かしさを思い出す。帰りは当時「新道」と言っていた今の石岡、紅葉線を歩いた。車もめつたに通らない砂利道を下駄の音が響いた。部落に入ると一人づつ分かれていった。

観音詣りももう一つあった。昭光寺観音堂から山門をくぐり、上玉里、下玉里、高崎境から館山神社（土地の人は「いなっしやま」という）の石段を降りて高崎の浜通りから高浜、三村そして野寺へと行った。この辺りでは大きい観音堂があり店も出て賑わっていた。帰りは高浜からバスで来た。

このお詣りは二つに分かれているが観音様を詣る一つの道だったと思う。子孫繁栄や家内安全は何よりも女達の安産を願う道にほかならないと思う。生命につながる道だったと思う。

今も小川方面へのお詣りは歩いていくが、野寺へのお詣りは代表が車で行って、行かない人のお札を貰ってくるという形になったそうだ。生命に対する喜びや悲しみを皆で分かち合い、子供達の成長を願って歩いた道は忘れられていこうとしている。この道に変わる新しい道が必ず出来るだろうか。どんな道だろう。

多くの女達が祈り、願って歩いた道を私も歩いた一人としてこの道を伝えていきたい。若い人や幼い子供達と生命のことを考える場を持つたり、日常生活の中で生命を燃やして生きている姿を伝えていこう。その日々の積み重ねがやがて来る日に六つの道につながっているのだろう。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上どの道に行っても

良い。次の世代の人達も精いっぱい生命を燃やして生きてくれるだろう。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年6月で4年目を迎えます。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会を行っております。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

世界一小さな物語「一行文」

(絵と一行文教室より)

有村政子

- ・米寿の母 医者にも触らせず帰りは笑い声
- ・霜柱 手のひらでとけた

高野のぶい

- ・いつのまにか鉢いっばいのシクラメン
- ・露天風呂 木の葉も小鳥もみな仲間
- ・ぴよんと跳ねて餌を待つ

大津礼子

- ・ふわふわと飛ぶ猫の毛 春はすぐそこ
- ・いだってとげとげの心 ケーキでも食べようか
- ・春の装い 散歩道
- ・ボール蹴る子の額に春の光
- ・ガラス戸に手形残して孫かえる

月に一回、絵と一行文の教室に出かけることを楽しみにしている。全員が、毎回一行の文を出してくれるのではないけれど、書いてくれた文はとても暖かく、自分の日常を大切に考えて、楽しむことの探索に一生懸命である。私達はともすると自分の日常には楽しいことが何もないと勝手に思い込んでしまったりするものです。でも楽しい事は気がつかないだけで本当は沢山あるのだ、と意識して見つけてみると、実にたくさん嬉しく楽しいことがあるのだ、ということに気がさせてくれるものです。

白井啓治

縄文踊りは世界を救う！

ふたは自給農園 松山有里

先日のごとば座の公演では私と私の住む瓦谷をモチーフに、「里子『大地の舞い』」が行われました。脚本は事前に白井さんからいただいたのですが、自分のことなのに、他人のこのようなように観ていました。

「里子」という別人格が私と同じようなことをしている、というような感覚。やはり小林さんは独特の世界を創れる人なのだなあとあらためて思いました。

白井さん、小林さん、野口さん、恵子さん、兼平さんや小林さんのお父さん、おかあさん、他のみなさんも本当にありがとうございました。野口さんの土笛、恵子さんの太鼓で会場には縄文的な雰囲気だだよい、風の音、大地のぬくもりが感じられる舞台となりました。

以前にオロロムの公演の時、小林さんが踊った「大地の舞」で最後に両手を前にささげて頭を深く下げるといふ舞を観て、「ああこのような仕事を日頃畑ですればいいのだなあ」と思ったことを思い出しました。体がその姿勢をとれば、自然に心もそれについていくような気がします。ついつい仕事としてやってしまう畑ですが、本来がやはり常にあの深く頭をさげ、両手を前に捧げて祈る、あの姿勢が必要なことなのだと思います。

公演の最後に恵子さんの太鼓に合わせて、即興で「縄文踊り」をみんなで踊りました。白井さんがまず手を振って踊りだしたので、なんとなく手を振ってみたら、今度は太鼓に合わせて足が踊りだしました。こんなふうに入前で踊ったのは初め

で自分でもびっくりしたのですが、気持ち良くてずっと踊っていたいとも思ったのでした。

先回田の神様を収穫祭のときに焼いたと書きましたが、その時は真つ暗になった庭で火を焚き、数人で田の神様をそこにくべました。そこで誰かが、「ここで踊ったり、歌ったりしないと変じゃないのか」と言い、それでは、といったところで、わたしたちはそこで歌う唄も踊る踊りももっていないことにはたと気づいたのでした。仕方なくみんなでマイムマイムを踊ったのですが、このようなときに踊る踊り、歌う唄がないのは本当に寂しいことです。いつかそのような踊りを創りたいものだと思っていました。小林さんの踊る舞から、何かそのような踊りをそこから創りだせる予感がありました。

きつと縄文の生活ではそんな踊りや祭りが毎日のことだったのでしよう。考えてみると今の生活は祭りがなさすぎて、バランスが悪いような気がします。だから若い人たちは民族楽器にはまったく、フラダンスを踊ったり、スピリチュアルに傾倒したりするのではないのでしょうか。たとえばオーストラリアの先住民のアボリジニの吹く楽器、ディジリドゥは吹いている人にも、聴いている人にも、深く細かいバイブレーションを与えます。これはアフリカの太鼓ジェンベにも言えますが、それによって自分の体が気持ち良くなるのです。そのような「自分自身の体を深く感じる行為」は、もしかしたら人が生きるうえでたいへん重要で、不可欠なもののひとつなのではないかと思っっています。これは手作業である、畑の草取り、田の草取り、稲刈りなど、同じ動作をしばらく続ける畑の作業でも同じ効果があります。

一人ひとりが常に自分の体に気持ちのいいことを1日一回でもやっていけば、世界はかなりいい方向に向いていくのではないでしょうか。だから無心になって踊ったり、歌ったりすることは大げさにいえば世界平和にもつながることなのではないかと思いません。

縄文踊りは世界を救う！ ぜひとも今年の収穫祭ではみんなで踊って歌う輪をつくりたいなあと思っています。

里子

小林幸枝

二〇〇九年最初の公演は、瓦谷に百姓暮らしをするふたば自給農園の松山有里さんと、松山さんが耕している畑から出てきた土偶の欠片をモチーフに書かれた物語を行いました。

目鼻立ちのはつきりとした、今の日本人とは全く違う顔立ちの土偶の欠片は、松山さんと脚本の白井さんが畑仕事をしている時に、松山さんの鍬の先に掘り起こされて出てきたのだそうです。

白井さんは、掘り起こされた縄文人の顔とモンペ姿の松山さんを見て、これは物語になると直感的に感じ「里子・大地の舞い」を書いたそうです。

里子という名は、白井さんの里山に住むイメージの女性で、松山さんとは直接関係がないのだそうです。松山さんを表すのにピッタリの名前です。もし、劇中に松山さんが舞ったら物語ではなく、実在の人物になってしまうと思います。

物語のモチーフとなった顔の土器を、オカリナ奏者の野口さんが茨城県の考古学研究機関に見て

もらったところ、縄文後期の土偶ではないかとのことで、とても貴重なもののだそうです。土偶は、九十%ぐらいが女性を形どったもので、松山さんが畑から掘探したものも、女性の顔だろうとのことでしたが、物語では縄文の男として登場します。

物語の中で縄文人の男が里子に言う言葉にこういうのがあります。『里子。お前は常陸娘子（ひたちおとめ）だ。お前が、この里に鍬を打ち、豊穣の時を紡がんと思うのなら、常陸娘子らしく男に恋をして、産霊（むすび）の神の力を持って』と。私のとても好きな言葉でした。

この言葉と同じように、松山さんは、この春に素晴らしい男性と結ばれます。これを知った私は、現実も夢も物語もすべてが一つになってしまったように思いました。そして、人生ってやっぱり物語なんだと思いました。

公演では、野口さんが縄文の土偶が出てきた畑の土で作った土笛で風の声を吹かれ、大地の響きを恵子さんのジェンベが鳴らしてくれました。父が、土偶のレプリカを作り舞台装美してくれ、兼平さんの描かれた土偶の顔が舞台背景画として大きく飾られ、とても楽しく、そして嬉しく演じることが出来ました。

舞台が終わったら、白井さんが松山さんとご主人となられる男性と父を舞台に呼び、恵子さんのジェンベに合わせて即興に縄文の踊りを踊った時の幸せ感は何とも言えないものでした。

松山さんの畑の近くに常陸国分寺、尼寺などの瓦を焼いたと言われている「瓦塚跡」があり、今発掘作業がされています。国分寺は、私の家のすぐ裏ですが、国分寺の瓦がここで作られたとは知

りませんでした。

でも、歴史にはあまり詳しくはありませんが、瓦塚の発掘調査も重要でしょうが、同じ場所の縄文の文化の栄えたことの調査が先のような気がします。縄文の暮らしを深く知ること、この常世の国の未来の暮らしのあり方を示してくれるような気がします。

「里子」を演じ終わって、私達の古里には本当に大切な物語が沢山あり、それらが古里の未来を導いてくれることをより強く思いました。

編集後記

常陽新聞のエッセイにも書いたのであるが、里山の斜面いっぱい広がった梅林に、梅吹雪というものを見た。桜吹雪に負けないほどの梅吹雪に圧倒された。なかなかワツと咲き乱れて散っていく花ではないので花吹雪を見ることはあまりない。こうした情景というのは、梅畑を持つ人ならよく目に余光景なのかもしれないが、私には初めての体験であったので、大層な驚きであった。これはもしかしたら、温暖化の影響で梅の花も一斉に満開状態になることで、吹雪現象をつくっているのだろうか。だとすれば恐ろしいことだ。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第13回定期公演
歴史の里石岡で一番大事にしたい舟塚山古墳から眺める常世の国をモチーフに創作された不思議の物語朗読
「霞ヶ浦の紅い鯨」「古里は春の夢」

4月19日(日曜日)開演午後2時



一人は一人
そして一人は二人

ことば座「風の塾」09年度受講生募集!!

ことば座「風の塾」は、石岡市に生まれた舞台表現「朗読舞」を普及し、楽しんでもらうために、また穏やかなふるさとに流れる風を言葉や色に紡ぎ、そして朗読に語るという楽しさを知ってもらうために、脚本：演出家の白井啓治を塾長に、「ふるさと風の会」会員の協力を得て開設された、ふるさとを「言葉」に楽しむ教室です。

募集教室

- 1) 絵と一行文教室(講師：ことば絵作家兼平ちえこ、脚本家白井啓治)
ふるさとの風を色に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。
- 2) 手話に遊ぶ教室(講師：朗読舞女優小林幸枝、脚本家白井啓治)
手話に遊ぶ教室は、手話を感情の肉体表現技術としての側面から、手話の舞を楽しみながら言葉としての手話も覚えていただくという教室です。
- 3) 朗読教室(講師：白井啓治)
朗読は演劇です。演劇とは劇しく(はげしく)演じることです。自己表現としての朗読を指導する教室です。
- 4) 文章(エッセイ)教室(講師：白井啓治)
本教室は、心象を一行の文に表現することに出発し、自由で自在な形式にとらわれない文作を楽しんでいただく教室です。

教室の詳細はことば座事務局(0299-24-2063)までお問い合わせください。